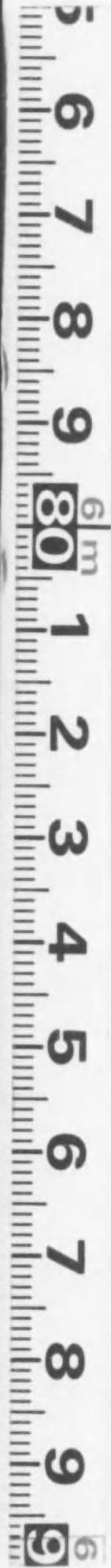


F13
T-31

F13-Ta31ウ
1200500763693



始





工史
空子著

F13
T431

4A-70

F13

Ta31

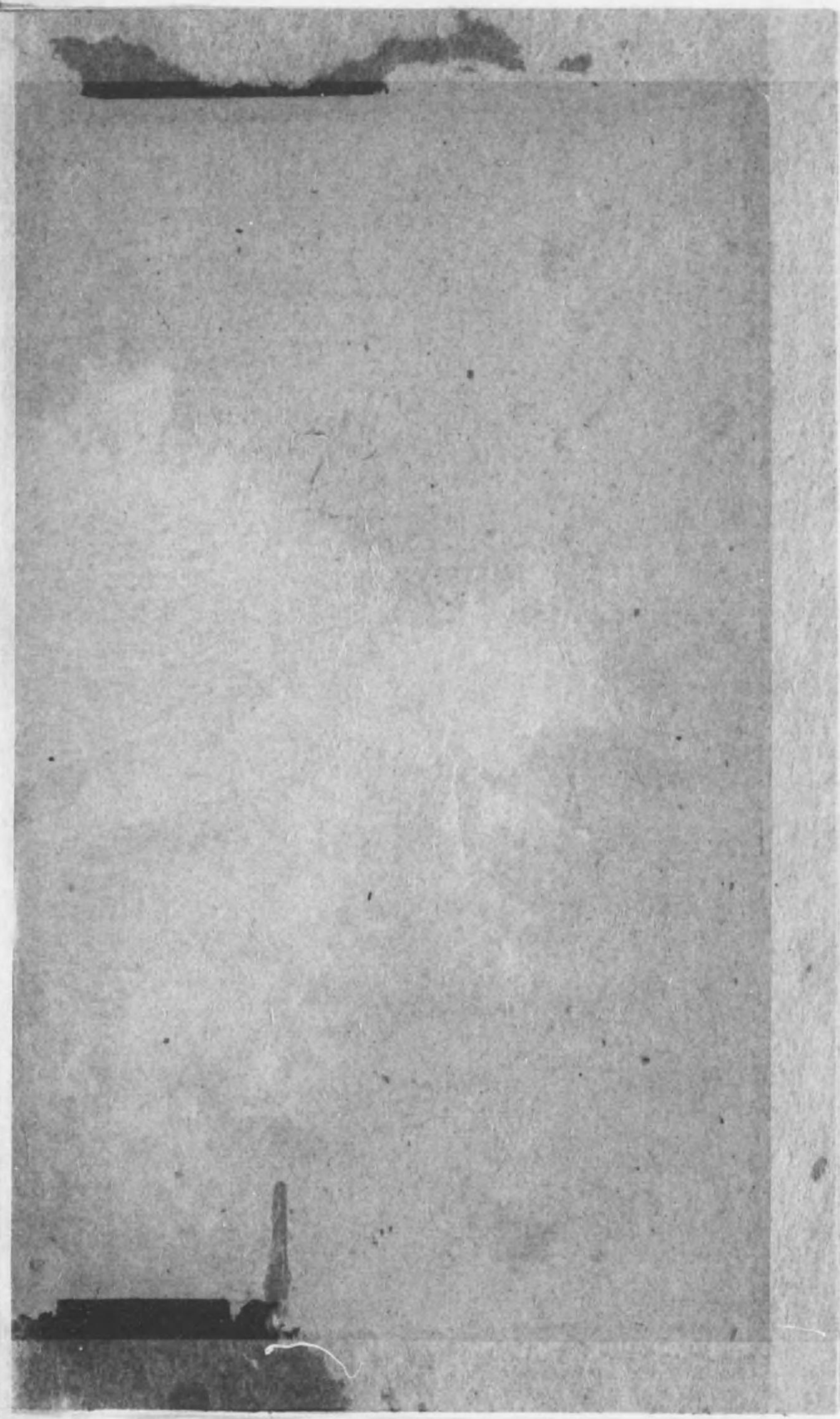
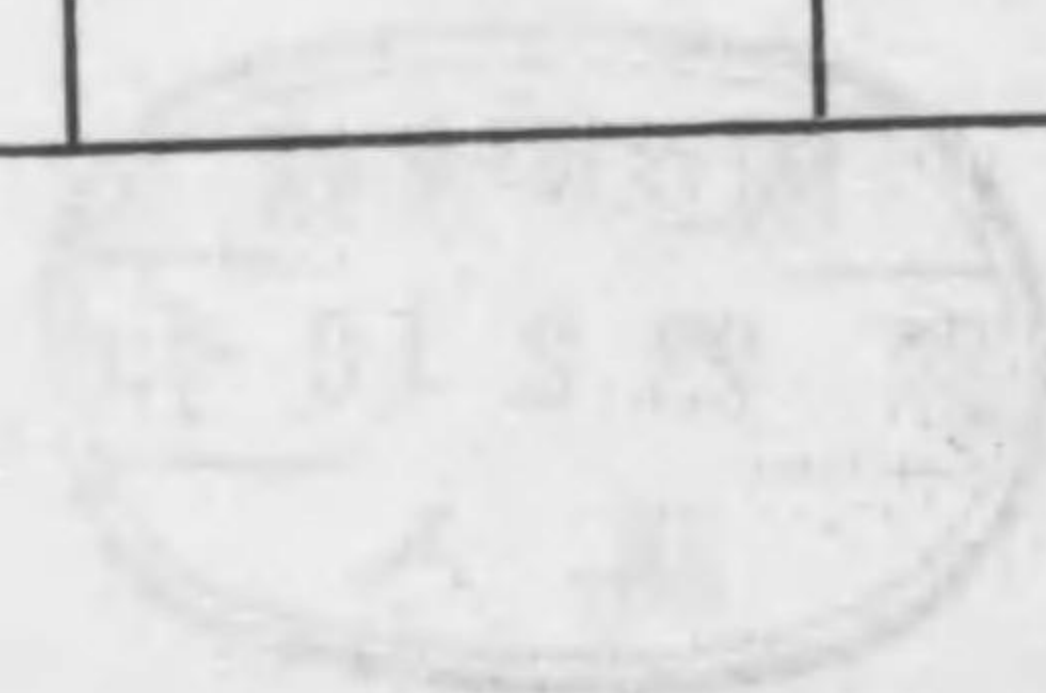


虹

高濱虛子著

苦樂社版

小說集



目次

國立圖書館
昭 23. 2. 10 和
購 入

虹……………一

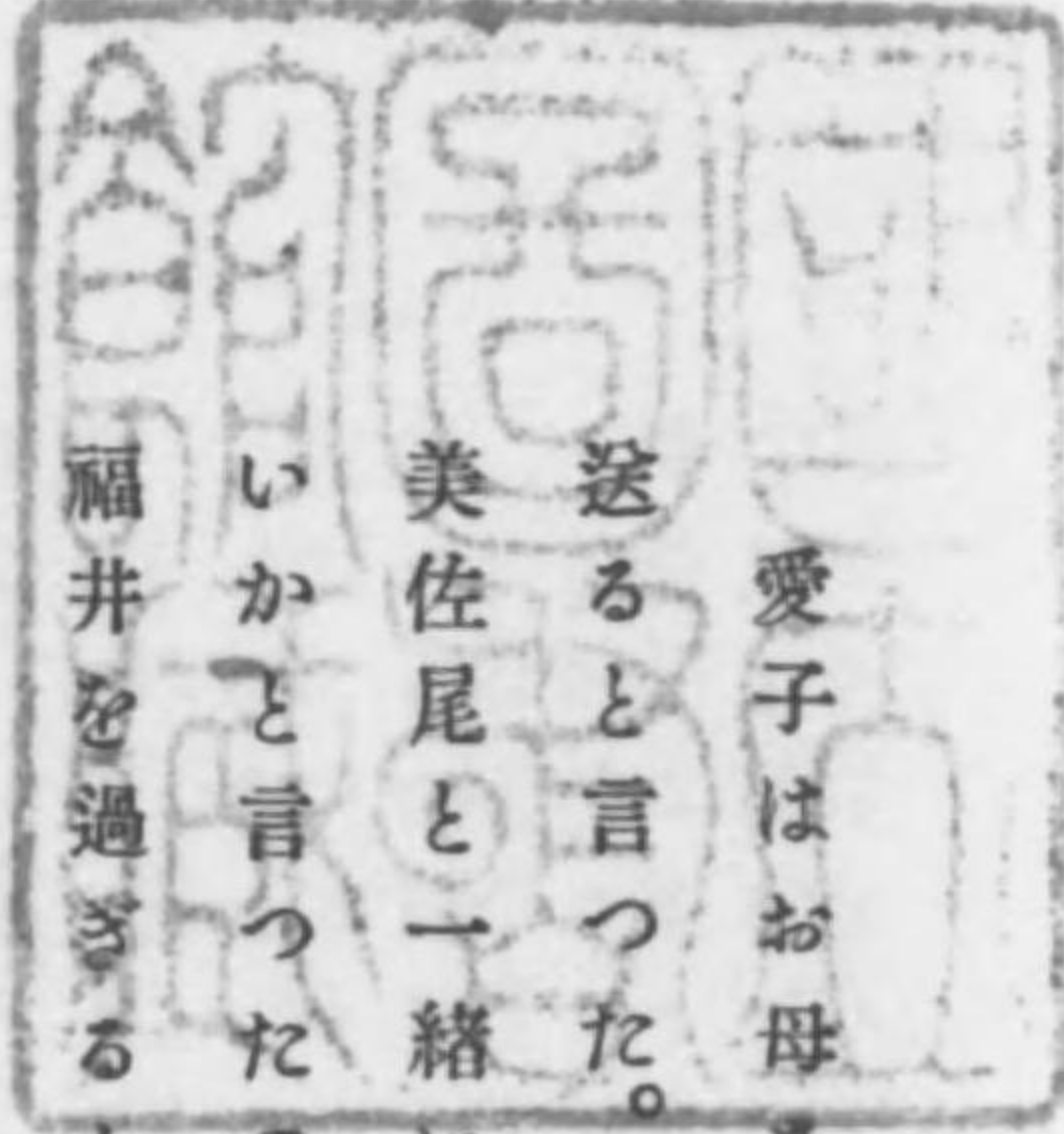
愛居……………二五

音楽は尙ほ續きをり……………四一

櫻に包まれて……………一一一

虹





愛子はお母さんと柏翠と三人で、私と立子たちこを敦賀まで送ると言った。それに及ばぬ、疲れてゐるであらうから美佐尾と一緒に福井で降りて三國へ歸つた方がよきはないかと言つたのであるが、強ひて敦賀まで送ると言つた。福井を過ぎると汽車も大分すいて、私等は片方に腰を掛け、その向ひ側には愛子とお母さんと柏翠とが腰を掛けた。

愛子も柏翠も私等に別れともないやうな素振りが見えてゐた。私等はこれから芭蕉二百五十年忌法要に列席するため近江、京都、大阪、伊賀と旅行を續けるので、柏翠も同行したい容子であつたのだが、其健康が心配であ

つたのでそれとなく之を止めた。愛子も柏翠と同じ病氣で此の間も交るゝ臥せてゐたといふ話を私等は聞いてゐたのである。私は愛子の裏の二階で、九頭龍川の吹雪の壯觀を是非見せ度いといふことを言つた時分に、そんな時電話を鎌倉にかけて、今吹雪がしてゐますと知らせてくれ、ばい、ではないか、と言つたら、それでは今度はさうしますと言つたことを思ひ出した。

その時ふと見ると、丁度三國の方角に當つて虹が立つてゐるのが目にとまつた。

「虹が立つてゐる。」

と私は其方を指した。愛子も柏翠もお母さんも體をねぢ

向けて其方を見た。それは極めて鮮明な虹であつた。其時愛子は獨り言のやうに言つた。

「あの虹の橋を渡つて鎌倉へ行くことにしませう。今度虹がたつた時に……」

それは別に深い考へがあつて言つたことゝも覺えなかつた。最前から多少感傷的になつてゐるところに、美しい虹を見た爲めに、そんなおとぎ噺みたやうなことが口を衝いて出たものと思はれた。私もそこに立つてゐる虹を見ながら、其上を愛子が渡つて行く姿を想像したりして、

「渡つてゐらつしやい。杖でもついて」

「まゝ杖をついて……」

愛子は考へ深さうに口を噤んだ。

愛子とお母さんと柏翠とは敦賀で降りた。さうして私と立子との乗つてゐる汽車がそのまゝ發車して京都へ向ふのに淋しく手を振つてゐた。

三國の町は九頭龍川に沿ふて其河口迄帶のやうに長く延びてゐる。昔の日本海を通る船は大概此所に船繋りしたのださうで、三國港といへば随分股賑を極めたもので

あつたといはれる。最近まで絃歌の湧き立つ妓樓が澤山あつたさうである。今でも町を通つて見るとそれらしい家が軒を並べてをるのが目につく。其九頭龍川に臨んだ寺に俳妓哥川の隱栖してをつた寺があるが、さうして其處の住職も永諦といつて柏翠の俳句の弟子であるが、其近所の方に愛子とお母さんは住まつてゐる。お父さんは別の大きな家に住まつてゐて、とき／＼このお母さんの家に来るのださうである。私は、

川下の娘の家を訪ふ春の水

といふ句を空想して作つたが、其お父さんのゐる本家といふのは町の中央にあつて、愛子の家が矢張り川下であ

つたことを後になつて知つた。

はじめ金津で三國線と乗換へた時に、柏翠と愛子とが迎へに来てゐるのを人に見出した。時雨日和であつたので、其邊が薄暗く、藁頭巾といふものをかぶつた人が多い中に、其等の人々にもまれてゐる二人の姿を見出した時は淋しかつた。私等はこゝに来る迄、二人の健康が氣にかゝつてゐたのであるが、此の時雨日和に三國から此所迄私等を迎へに来てゐるのを先づ心強く覺えたのであつた。

愛子の家の床脇に愛子によく似た一人の娘さんの大きな寫眞が飾つてあつた。これは愛子の姉さんださうであ

るが若くして亡くなつたといふことである。其外にまだ一人の兄さんがあつたが、それも若い時分に亡くなつたさうである。生きてゐたらば丁度柏翠ぐらゐの年輩であるとお母さんは話してゐた。今は親一人子一人で、愛子とお母さんと、それに最近は柏翠と、此の三人が互に頼り頼られて淋しい生活を營んでゐるもののやうにも見え

た。

以前柏翠が鎌倉の家へ来た時分に、

「此頃、愛子と結婚しようかと思ふこともありますが

……」

と私の顔を見てから、

「二人共體が悪いのですから……」

と言ひ澀んだ。私は暫く考へてから、

「結婚してすぐ不幸な目に逢ふ人も多いやうだから、まあよく考へてからにしたまへ。」

と言つた。さうして何だか、そんなことは言ふべき事だ無いやうな心持もしたのであつたが、柏翠は決然とした口調で、

「結婚しないことにしませう。其方が結局二人の幸福ですから。」

と言つた。私は今迄私のいふことは何でも正直に守る柏翠であることを知つてゐるので、柏翠の此の言葉に對し

て、慘酷な申譯の無いことを言つてしまつたやうに覺えた。併し其を又取消す氣にもなれなかつた。

柏翠は鎌倉の七里ヶ濱の鈴木病院に十年間も入院してゐた天涯孤獨の人で、其所で矢張り入院して來た愛子とも逢ひ、又愛子のお母さんとも心やすくなつたのである。愛子が柏翠に俳句を學んだのは其頃である。其後愛子は三國に歸り、柏翠は鎌倉と三國を往來し、今は三國に滞留してゐるのである。

金澤の俳句會の濟んだ翌日、山中の温泉に行くことになつて、其俳句會に列席した柏翠と愛子とお母さんと、

又愛子の友達の美佐尾も矢張り一緒に行くことになった。
美佐尾といふのは、愛子のお父さんが銀行の頭取をしてゐた時分に矢張り其銀行の重役であつた人の娘で、男子を凌ぐ位立派な體格をしてゐるのであるが、餘所に嫁して間も無く不幸にして一人の女の子を連れて里方に歸つてをるのである。愛子よりは年上であるが、愛子の俳句の仲間でもあり、又病弱な愛子の爲めに行届いた親切な友でもあつた。

其朝早く金澤の宿の廊下で愛子の姿を照らし出した電燈の光は暗らかつた。「よくおやすみでしたか。」と聞くと「よくやすみました。」と答へはしたが、顔色も悪く元氣

も無ささうに見えた。其傍に美佐尾の丈高い幅の廣い姿も見えた。

山中に着いた時は非常に寒かつた。宿の前の山は一面に紅葉してゐたが、其全山の紅葉の上に雪がさら／＼と降つてゐた。それが大變に美しかつた。寒いのも忘れて、障子を開けて皆それを見てゐた。一行は三十人許りであつた。ハンケチで喉を巻いてゐる愛子も人々に交つて其雪を見てゐた。柏翠も襟巻に顔を埋めて同じく人々に交つてゐた。柏翠は時々咳をしてゐた。

又一句會はじまつた。金澤の俳句會の時もさうであつたやうに、俳句を作らぬお母さんは、句會の間は愛子の

後ろに隠れるやうに坐つてゐて、一座の邪魔にならぬやうにつとめてゐた。

其晩寒々とした廣間に三十許りの膳が竝べられて皆そこに坐つた。それは温泉宿によく見る演藝場の一端であつたが、其三十人許りの人が、片隅にちま／＼とかたまつて坐つてゐた。

例の通り主催者側の挨拶があつてから、盃がまはるにつれて大分皆饒舌になつて來た。一座はざわめき立つた。廣間の一方にかたまつてゐるやうに見えた三十人許りの人も今は座敷一杯にゐるやうに思へて來た。愛子や柏翠

はと見ると皆おとなしく箸を執つてゐた。美佐尾もお母さんも矢張り汁椀を取り上げて顔を半ば隠してゐた。

其うち座を立つて私や立子の前に來る人がだん／＼殖えて來た。飲み過ぎないやうにと氣をつけてゐたのであるが、受けては返す盃が重なつて來るのであつた。其時私の後ろ脇に來て坐つた一人の人があつた。其は大阪の本田一杉であつた。一杉は小松生れの人で丁度用事があつて歸國したら、私が今日此の山中に來たといふ話が聞こえたので、後を追つて來て最前の句會にも列席したのであつた。大分席が亂れはじめた頃だったので、私の傍に來て之も私に盃をすゝめた。見ると一杉の顔も大分

酔がまはつてゐるやうに見えた。其他人々の顔が澤山私の前にあつたが、其等の人も皆酔ふてゐるらしく、頻りに私に盃をさした。其時私の前に來て坐つたのはお母さんであつた。

「お慰みに一つ唄はせて貰ひませう。」

さう言つて謠ひはじめた。さびた聲で覺えず耳を傾けしめた。この人が三國で鳴らした名妓であつたらうといふことはかねがね想像したところであるが、此の俳句會の一行には今迄は蔭にくくと身を置いて、あるかなきかの存在であつたのである。それはさういふ風に振舞つてゐることが尋常の人ではなかく、出來ぬことであらうと

思はれもしたのであるが、其人が今私の前に坐つて、目の前に現れて、きちんと座を正して、唄を謠つてくれたといふことに私の胸は打たれた。「御立派ですね。」と讃めることすらが此の人にはをかしいやうに思はれて、私は唯黙つて盃をさした。私は此の場合此の思ひもよらぬ座を引締めた藝の力といふよりも此の思ひもよらぬ私をもてなす爲めの優れた藝に少し眼がしらが熱くなつて來るのを覺えた。

其うち誰かがすゝめたものであつたか、又自ら進んでやつたものか、お母さんは立上つて踊りはじめた。其がまた立派な手振りであつた。こゝにも亦昔の名妓の面影

を見る事が出来て、私の眼からは涙がこぼれ落ちる許りになつた。もとより其は酔が手傳つた爲めでもあつた。

其時ふと座を立つて其お母さんの後ろに立つたのは愛子であつた。それが亦踊るのであつた。私はあのかほそい弱々しい愛子がこゝに現れやうとは豫期しなかつたので、忽ち胸にこみ上げて來るものがあつた。

私は遂に涙があふれて來た。覺えずハンケチを取り出して歎歎するのを人に見られまいとしたが、及ばなかつた。忽ち聲を放つて泣いた。暫く經つて氣がついて見ると、私の傍にゐた立子も泣いてゐた。遠くに坐つてゐた美佐尾も泣いてゐた。其他の人は皆七十の老翁が聲を放

つて泣くのを怪げんな顔をして見つめてゐた。第一踊つてゐたお母さんや愛子は踊るのを止めて、其に柏翠も、心配さうに私の前に來て坐つたが、私は尙ほ泣くのを止めぬ爲に自分等の座に歸つて靜かに坐つた。愛子は暫く黙つてうつむいてゐたが、遂にハンケチを顔に當てゝ泣きはじめた。

其時後ろに坐つてゐて聲高に演説めいた口調で怒鳴りはじめたのは一杉であつた。何を言つてゐるのか充分に判らなかつたが、ところ／＼聞きとれた處を綜合して見ると、其は斯ういふ意味であるらしかつた。兎角若い諸君は自分等の爲めに先生を利用しようとして遠方迄引張

り出す。それが爲めに先生は泣くのである。諸君は慎ま
なければならぬ、と斯ういふことを繰り返して言つてゐ
るやうである。一人の若い幹事は疊の上に平蜘蛛のやう
に手をついて、悪うございました、どうか御勘辨を願ひ
ます、と私にあやまつてゐた。斯る騒々しい間も、愛子
は尙ハンケチを顔に當てたまゝ、潜々と泣いてゐた。私も
泣くのを止め、立子も泣き止め、美佐尾も泣き止めたの
であるが尙いつまでも泣き續けてゐた。

私は何故泣いたのか、恐らくそれは酔ひ泣きといふも
のであらう。昔、木賊の翁は、子を失ひて信濃のそのは
ら山で木賊を刈り、道行く人をとめて、子に行き逢ふこ

とを望んでゐたが、時には子を思ふあまりに、盃を啣
で酔ひ泣くことがあると謠曲にある。私が泣いたのは其
木賊の翁の酔ひ泣きに似てゐるともいへるであらう。

其夜立子と愛子と美佐尾とは温泉に這入つた。裸にな
つて湯壺にひたつて見ると、美佐尾はづばぬけて大きく、
立子は小さかつたが、愛子は更に／＼小さかつたといつ
た。さうして美佐尾の乳房を愛子は赤ン坊の如く吸ふ眞
似をしたと、これは立子が其後私に話したことであつた。

其翌朝は天氣がよかつたので皆打ち晴れた顔をして宿

を出た。多くの人は北に別れて、私と立子と、愛子、お母さん、柏翠、美佐尾の六人は南下する汽車に乗った。美佐尾だけ福井で降りて先づ三國に歸り、残る五人は敦賀に向つたのであつた。

22

其後私は小諸に居て、浅間の山かけて素晴らしい虹が立つたのを見たことがあつた。私は愛子に葉書を書いた。其には俳句を三つ認めた。

浅間かけて虹のたちたる君知るや

虹たちて忽ち君の在る如し
虹消えて忽ち君の無き如し

（昭和十一年・一、『若草』）

虹

23

愛居

春江の驛から乗込んで来たのは美佐尾とふく子の二人であつた。美佐尾はこの前逢つて知つて居るばかりか、躰が大きいので人込みの中でもすぐそれと判つた。その後についてゐるのはふく子であらうといふことはすぐ想像がついた。ふく子はもとから此の春江に住まつて居るのであるし、美佐尾は最近再縁して矢張り此の春江に居るといふことを聞いて居た。私等が今度また三國へ行くのに就いて、二人は出迎へ旁々この春江の驛から乗つたものであることはすぐ分つた。

座席に坐つて居た私等三人は立上つて二人に合圖をした。二人は人込みの中を泳ぐやうにして近附いて来た。

美佐尾とは一別以來の挨拶を交したり、ふく子とは初對面の挨拶をしたりして居るうちに汽車はもう次ぎの驛に著いた。ふく子が提げて來た重箱の中のおはぎが取り出されたので、それをつまみながら柏翠の其後の容子を聞いた。一時は危篤だと思はれた自然氣胸も、醫者の手當てが早かつたのと、愛子やお母さんの熱心な介抱によつて漸くこの頃は部屋のうちは歩くくらゐになつたといふことを聞いた。

福井の乗換には多少の時間があつたので、係員の居るバラック建ての事務室に通されて、そこで火鉢に手を翳しながら待つことになつた。そこで改めて美佐尾に再婚

の悦びを述べたのであるが、美佐尾は、大同に居る兄さんの文子の消息がまだ判らぬことを心配してゐた。兄さんが無事に歸つたなら實家に残して來た子供の事も相談してなんとか片を附けたいものだといふやうなことを話した。

混雜の電車を三國で降りて暫く歩いて愛子の家に着いた。愛子の家の前に近附くとそこに袴をはいて立つてをる柏翠を見出した。肉つきは以前とはあまり變らなかつたが、その顔色はたいへんに悪かつた。愛子もそばに立つてをつた。二人はいそ／＼と私等を導いて座敷に通

した。年尾は始めてとあつたが、私や立子は此前一度来たことがあるので此座敷は知つてゐた。床脇にある愛子の姉さんの大きな寫眞が先づ目にとまつた。年尾に、これが若死した愛子の姉さんの寫眞だと話した。

はじめ愛子の電報が小諸の家に来て、柏翠が自然氣胸で危篤の状態を續けて居る、といふことを知らせて来た時は胸を衝くものがあつた。嘗て柏翠が鎌倉の私の家へ来た時、其友人の一人が自然氣胸に罹つて苦しんだ容子を話したことがあつた、自然氣胸といふ病氣は肺臓の壁に孔が出来て、空氣が肋膜の中に溜まつて、呼吸困難に

陥るものだといふことを話した。其當時他事として話してゐた其の病氣に今は柏翠自身が罹つたわけであつた。其後又つゞけ様に電報が来て、危篤の状態が尙續いてゐるが最善の力を盡してをるとあつたり、やゝ小康をつゞけてをるとあつたり、漸く良方に向ひつゝあるとあつたりした。

柏翠は先づ袴の膝を正して、其節一方ならぬ心配をかけたことを感謝すると言つた。さうして私等三人を前に置いて、其病氣當時の事を話した。坐つたまゝで襖にもたれて一時は失神して居たが、漸く醫者が来てくれて、

空気を排出してくれたので気がついた。がすぐ又溜まるので苦しみがまたもとの通りになる。又排出する、といふやうなわけで、一時は自分も覺悟を極めたが、さうかうしてをるうちに其孔が塞がつて、漸く生命だけは取り止める事が出来たといふことを話した。時々愛子も口をはさんで其の話を補つた。柏翠よりもかほそくよわくしい愛子のことであるから定めて介抱に疲勞したことであらうと思はれたが存外元氣に見えた。

其夜は此前泊つた芦原あしはらの宿に行かうと思つてゐたが、構はなければ泊つてくれ其用意がしてあるからといふ愛

子や柏翠の言葉に従つて此處に泊ることになつた。明方に柏翠の咳續ける聲が隣室からいたましく響いて來た。

翌日の午前は九頭龍川に面してをる裏の二階に上つてそこでぼつ／＼集つて來る人と小句會をすることとなつた。其處の白い襖に恰も人が坐つてをるやうな染みがついてをるのを指して、

「これは私が凭れてゐて失神した時の形見です。寝ることも出來ず、どうすることも出來ず、ちつと襖にもたれたままで、遂に失神してしまつたのでありました。」と柏翠がいつた。その時全身が汗にひたつてその汗が著

物に沁みて襖まで透つた其跡であるとのことであつた。
愛子はその襖を開けて白紙に刷つた大きな鯉の形を見せた。其鯉は柏翠が病氣になる前に、暫く釣りに熱中してこの九頭龍川で釣つた鯉に墨を塗つて型をとつたものであつた。それは素晴らしく大きな鯉であつた。又同じやうな別の紙を見せた。それは前の鯉に較べたらやゝ小さかつたが、それでもかなり大きな鯉であつた。
今は其等は凡てが語り草になつて此所で楽しい俳句會を開かうといふのである。其所には置炬燵が拵えてあつて、それには赤い美しい布圍が掛けてあつた。

九頭龍川の景色はいつ見てもいゝ眺めである。河口に突立つてをる白い燈臺も、中洲に枯れたまゝつゞいてゐる蘆叢も、中流に舟がゝりしてをるかなり大きな四五艘の發動機船も、遠く對岸につゞいてをる松林も、すべて一望のうちにあるのであつて、殊にけふは時雨模様の天氣であつて、一天が曇つて來たり晴れて來たり其變化具合も面白かつた。殊に目の下には一艘の大きな朽ち舟があつて半ばは水に沈んでをつた。柏翠が鯉を釣つたといふのも此の朽ち船の軸に乗つてのことであつたと云ふことを愛子がいつた。

私は此等の景色に目をやりながら心はいつか柏翠のこ

とに及んでゐた。

柏翠は淺草の凌雲閣近くの家生まれ、早く両親を失ひ、兄弟も無く、まつたくの獨りぼつちであつて、鎌倉の七里ヶ濱の鈴木病院に入院患者として十年餘りも居つて、全く其所を自分の家のやうにしてゐた。さうして病院に入院して来る同じ患者に俳句を勧めたりしてゐたが、その中に愛子もあつた。愛子に親しくなつた許りで無く愛子に附いて来てゐたお母さんとも心易くなり、愛子が三國に歸るやうになつてからとき／＼此の三國に行くやうになつた。始めは愛子の家の近所にあるお寺に下宿して

ゐたが、今は愛子の家に起臥するやうになつてゐるらしかつた。茲に来ては俳句を人々に教へて三國俳句會といふ會を作つたりしてゐた。運命の二人は、こゝに美しい俳句の師弟として共同の生活を營んで居るものゝやうに見えた。愛子は柏翠を先生先生と呼んでゐた。柏翠は愛ちやんと呼んでゐた。お母さんも亦た二人の交遊を許してゐるやうに見えた。

晴れたり曇つたりしてゐた九頭龍の川面は忽ち時化模様になつて来て俄に大粒の雨が降り出して來た。川中にもやつてゐる大きな漁船の甲板に干してあつた網を慌て

て取り入れやうと打騒いでゐる船人や、河口の方から矢の如く歸つて来る釣船などが目についた。目の下の朽ち舟の周囲には今は白い波が立つてゐた。さいせんから見ると、其船の中に漂うてゐる菜屑は、波のうつ度に舟の外に出るかと思はれたが、いつか又中に戻つて来て同じところを經めぐつてゐた。

夕食は私等三人と柏翠と愛子だけで攝ることになつて、又前記の裏二階に陣取つた。そこには鍋がぐらぐら煮え立つてゐて、新鮮な魚が其鍋の中にあつた。

柏翠が此三國へ来る前の事であつた。立子と晴子の姉妹が鈴木病院の病室に柏翠を訪ねたことがあつた。其時丁度おひるであつたので、其病室で辨當を開いて食つた。柏翠も其病院の飯と一緒に食つた。其は井にさらつと盛つてある御飯に、西洋皿のやうな佗しい皿に、昆布としんの佃煮、其に豆が二三十粒程添へてあるものであつた。それも柏翠自身取りに行くのであつた。折節隣の病室で咳き込んでゐる女の聲が聞えた。其は咯血をしてゐるものらしかつた。柏翠は、此病院の食物が此時勢の爲めだんぐ貧弱になつて来て、これでは榮養が攝れないから、最近に三國に行く積りだと話してゐた。十年間

住み馴れた其部屋の片方には三國に行く時に持つて行く
行李が出してあつた。これはいつか晴子が私に話したこ
とであつた。

其夜此二階に名前をつけて額を書いてくれぬかとのこ
とであつた。私は筆を執つて「愛居」と書いた。

(昭和二三・一、「小説と讀物」)

音楽は尙ほ續きををり

昭和二十一年六月

電報が来て、三國の柏翠、愛子、それに愛子のおつ母さんの三人は、六月一日の日暮方に小諸に著くといふことを知らせて来た。東京其他の地方から既に集つて來てゐる人々が訪ねて來るので、私はかなり忙しい思ひをしてゐたのであつたが、その間を抜けて、停車場に迎へに行くことにした。

上りの汽車がホームを目がけて這入つて來ると、止つたと思ふ間も無く早ぞろ／＼と人が推し寄せて來て、や

音楽は尙ほ續きをり

がてぎつしりと改札口に詰まつて、推し合ひへし合ひしてゐたが、なか／＼それらしい姿は見えなかつた。漸くおしまひの頃になつて、三人の顔が見えた。こちらが見つけると同時に、三人も私を見つけたものらしく、一寸目禮したが、併し割合に無表情で、改札口を出て來るのであつた。

「疲れてゐるな。」

と私は思つた。

「まあともかくも宿屋まで行かう。」

と私は先に立つて歩きながら柏翠を顧みた。

「よく來られたのね。草臥れたでせう。」

二三步あとからついて來る愛子をも顧みた。愛子は黙つてついて來て居つた。柏翠は、去年の夏自然氣胸を患つて何度も氣絶したことがあつたのであるが、愛子やお母さんの介抱で漸くよくなつたのである。それが一年もたぬうちに人にもみくちやにされながら汽車に乗つてこゝ迄やつて來たのは、亂暴と考へねばならなかつたが、又來たいといふ一心に來たとすると其にも同情せなければならなかつた。

小諸は坂道が多く、こゝもかなり上りになつてゐるので、肺を患つてゐる柏翠や愛子には苦しからうと思はれた。又ふり返つて見ると愛子は前のやうに二三步あとか

音楽は尙ほ續きをり

らついて来てゐたが、お母さんは更に遅れてゐた。見るとお母さんは重さうな荷物を背負つてゐるのであつた。

柏翠と愛子は二人共病人であるので結婚生活に入ることは二人の不幸であるから、結婚はしないといふことは曾て柏翠が私に話したことであつた。二人共鎌倉の七里ヶ濱の鈴木病院に入院してゐた頃から知り合ひになつて、其頃から俳句を愛子は柏翠に習つてゐた。愛子と共に暫く其の病院に行つてゐた愛子のお母さんも自然柏翠と心易くなつてゐた。そんな關係で、戦争が苛烈になつて、食物事情が悪くなつて來た時分、柏翠は三國へ行つて、お母さんと愛子の二人が暮してゐる家へ同居することに

なつた。愛子のお父さんは本家と呼ばれてゐる別の邸に住んでゐた。お母さんはもと三國の名妓とうたはれた人であつたが、早くから引きとられて別に分家として一戸を持つてゐるのであつた。愛子の外に一人の兄と姉とがあつたのであるが、二人とも若死をしてしまつたので、今は母一人に子一人といふ淋しい家庭である。其の死んだ兄といふのが生きてをれば丁度柏翠位の年輩になるのだとのことであつて、自然お母さんも柏翠を力にして何かと相談相手にしてゐた。柏翠は身内といつては殆どなく、十年餘りも唯一人で鈴木病院に入院してゐたのであつた。

宿に著いて私は玄關に立つたまゝで、三人を宿の亭主に紹介して、柏翠等に、兎に角に今晚はよく休むやうにと云つて歸つた。

翌日は三人とも少しの疲労も無いやうに身じまひをして、私の宅に來た。私の宅は座敷といつては二間ほか無いので、其八疊の方には、既に十人あまりの人が集つてゐて、がや／＼と話をして居た。お母さんや愛子は、次の六疊の間の隅の方に坐つた。

晝食は握り飯を大きな鉢に盛つて出して、それをめいめいが勝手に取つて食べることにした。柏翠と愛子は一

つの皿にとつた其握り飯を食べてゐた。晝飯をすましてから俳句會場に赴くのであつた。

百人ばかりの會合であつたが、俳句會が濟んで宴會に移り、色々な挨拶もすみ、餘興にはおはんや實花の踊や三味が興を添へた。それに杞陽が小唄を歌つたのが、素人らしくなく、騒々しい中に、しんみりと耳を傾けてゐるものもあつた。その時愛子のお母さんは、頬冠りをして立つて踊り乍ら、片膝の上に三味線をのせて、自分で歌つてそれを弾くのであつた。

「あれは何ものだらう。」
と目を瞠つてゐるものもあつた。おはんや實花も驚いて

音楽は尙ほ續きをり

見て居つた。

翌日は引上げる人もかなりあつた。が、東京からはん、實花、新潟からの素十、京都からの比古、和歌山からの春泥、芙蓉夫妻、但馬からの紀陽、香菴、三國からの柏翠、愛子、お母さん、其に年尾、立子、其他の人が、又私の宅に集つて、素十が云ひ出して、俳小屋開きをする事になつた。その俳小屋といふのは、古い蠶室を住居にしたものであつたが、それが漸く出来上つて、どうやら住める位になつたので、今日その俳小屋開きをしようといふことになつたのである。

その俳小屋は八疊だけ疊敷きになつてゐて、外は板間になつてゐる、その板間の真ん中に炉が切つてあつて、其炉の中には白樺の櫓が入れてあつた。愛子は此の白樺の燃えるところが見度いと言つた。愛子ははじめて白樺といふものを見たのである。

私は柏翠や愛子の疲勞を心配してゐたのであるが、案外にそうでもないらしく、殊に愛子は美しく身じまひをしてゐたので、それらしい容子は見えなかつた。唯しかしながら其かほそい體はどうしても病人といふことは隠くすことが出来なかつた。殊に踏み石の上に足を下ろして、板間に腰かけたまゝ、ちつと庭の方を見てゐる其姿

音楽は尙ほ續きをり

は淋しかつた。其も庭を見てゐるので無く、何か考へに耽つてゐるものゝやうに見えた。尤も席上の人は皆俳句に案じ入つてゐるので、誰も同じやうな容子であつたが、唯獨り群を離れて私等の方を背にしてゐる其後ろ姿が淋しかつた。

私が愛子や柏翠の容子に氣を配つてをつたのと同じく、杞陽は最前から深くものに案じ入つた容子で、愛子の起居が氣になつてゐるらしかつた。

杞陽は東京にゐる時分に九羊會といふ比較的若い人々の俳句會のメンバーであつた。柏翠も後れてから其會員

になつた、だから柏翠とは兼ねて知つてゐた間柄であつた。

杞陽は愛子には今度はじめて逢つたのであるが、柏翠から聞いてゐたこともあらうし、私も話したことがあるので、自然愛子の上に特に親し味を感じてゐたのであつた。

句を披講する場合になつて、かういふ句が讀み上げられた。それは

詩の如くちらりと人の炉邊に泣く 杞陽

音楽は尙ほ續きをり

といふ句であつた。

杞陽の眼は敏捷に、愛子の眼に光つた一滴の涙を認め
たものであらう。

曾て私は愛子が「虹の橋を渡つて鎌倉へ行かう」と言
つたことから、虹といふとすぐ愛子を思ひ出すので、小
諸にゐて浅間山に虹の立つた時、

浅間かけて虹の立ちたる君知るや

虹立ちて忽ち君の在る如し

虹消えて忽ち君の無き如し

といふ三句を書いて愛子に贈つたことがあつた。其後又
小諸に在つて

虹消えて音楽は尙續きをり

虹消えて小説は尙續きをり

といふ句を作つたが、これも何となく愛子を心に描いて
の事であつた。

その翌日もまた昨日集まつた人々の多くは俳小屋に集
つた。さうしてこの日の朝の七時の汽車で大方それ〴〵
地方へ歸ることになつた。そのうちで和歌山の春泥、芙

音楽は尙ほ續きをり

蓉夫妻、京都の比古、但馬の杞陽、香葎の五人は北陸線を通つて、三國の愛子の家に立ち寄らうかといふことになつて居たが、結極但馬の二人だけが同行することになつた。来た時の勢はなく、柏翠、愛子、お母さんの三人は淋しさうに發つて行つた。それでも杞陽、香葎二人が同伴したので車中はいくらか賑やかであつた。

あとで聞くとおりに依ると、一行は夕方の八時頃三國に著いて、杞陽や香葎は翌朝早く發つて、豊岡、和田山へ各々歸つたさうである。愛子や柏翠も、格別草臥れもせず、無事に歸つたといふ事を言つて来た。

昭和二十一年十月

今度はもう此三國の愛子の家に來ることも三度目で、私は勝手を知つてゐたので、年尾と共にすぐ愛子の病室に這入つて行つた。愛子は八月頃から病床に寝たきりであるといふことを聞いたので、一寸立寄つて見舞はうと思つて來たのである。はじめ小諸で催はされたホトギス六百號記念會が其後諸方で催はされ、金澤でも催はされたので其に出席し、又京都でも催はされるので其に出席する、其間に二日の餘裕があつたので、一寸立寄るこ

音楽は尙ほ續きをり

とにしたのである。

布團の中に寝てゐる愛子を見ると、特に着替へたものであらう、美しい着物を着て、其に髪も改ため、お化粧をさへしてゐるらしかった。

私等を迎へた愛子は、につと白い齒を出して笑つて、

「もう腰が抜けてしまつて立てないのですよ。」

と笑ひ乍ら淋しさうに云つた。それから又言葉をついで、
「時々坐つて見ることもありますが、咳が出て苦しいものですから。」

と云つた。さういふうちにも咳が出かゝるのをじつところへてゐるやうに見えた。繊細い^{かほ}躰が一層瘦せ衰へてゐ

て、布團から出てゐる手首の細いのもあはれであつた。

「元氣をお出しなさい。屹度よくなりますからね。」
と私は云つた。

「えゝ。」

と愛子は云つたが、又咳が出かゝるのでその後の言葉は續かなかつた。

愛子は微笑を含んで無理に元氣を出してゐる容子であつた。やがて私達は二階に上つて休息することにした。

「この冬の寒さを越せば」

と、柏翠はたゞそればかりを頼みにしてゐる様子であつた。

やがて柏翠は一枚の葉書を見せた。それは杞陽からのものであつた。その葉書にはこんな文句が書いてあつた。

生身魂といふものがあれば

三國へ行つてをるかもしれませぬ

綺麗な黄蝶が庭にゐます

蝶ならば三國までどのくらい時間がかゝつて行くかと思ひます

蝶ならば生身魂なら海こえて

これは私が三國へ立寄るかも知れぬといふことを柏翠が言つてやつたので柏翠によこした其返辭であつた。

其晩は下に降りて私は「虹」といふ文章を書いてゐたのを愛子に読んで聞かせた。これは愛子のこと書いたもので、読んで聞かせるといふよりは、何か書いて悪いことがあつたり、事實の上に間違ひがあつたりしたら其を訂正しようと思つてゐあつた。柏翠は、

「お母さんも呼ばうか。」
と言つたら

「えい。」

音楽は尙ほ續きをり

と愛子は言つた。お母さんは来て私と反對のがはの病床
近く坐つた。

読んでしまふと皆が頭を下げた。愛子の眼には又涙が
光つてゐた。

「書いて悪いところや間違つてゐるところは、さう言つ
て下さい。」

と言つたが、格別ないとのことであつた。唯永諦の寺か
ら愛子の家迄の距離が少し違つてゐること、それ
を直すことにした。

其の夜京都から私を迎へに比古が来たので二階に床を
三つ並べて比古、年尾と三人で寝た。

翌朝起き出でから、朝の御飯になる迄しばらく卓に凭
れて眺めて居ると、前の藏の屋根に一羽の鴉が来てとま
つてゐたが、それが棟の瓦をとん／＼と三足ほど跳
んで、こちらへ近づいて来た。そして「ぐああ、ぐああ」
と大きな聲をして鳴いて、又とんとんとんと三足ほど、
こちらへ近づいて来た。私は、「あれが杞陽の生身魂かな」
と考へて見てをると、段々と人間らしく見えて来るので
可笑しかつた。

朝飯がすんでしばらくたつてから美佐尾が自動車に乗
つて、私等を誘ひに来た。それは東尋坊に案内してくれ

音楽は尙ほ続きをり

る筈になつてゐたからであつた。

愛子の頁といふ「花鳥」一月號に載つた愛子の文章がある。その文章がこの日の事をよく書き表はしてゐる。其はかういふ文章である。

わがまゝ

愛子

床柱を背にされて先生が、「今度は貴女の爲に來たのですから何でも我儘をお云ひなさい。」とおつしやつた。

ホトトギス六百號記念大會の途中お見舞頂くといふだけで勿體ないのと思ひつゝ、寝たまゝの私は「はい。」と答へて涙ぐんだ。

明くる朝豫定の東尋坊へ向ふ自動車が來た。先生は、「それでは行つて來ますよ。」と言つて下さつた。年尾先生が「大人しくして東尋坊の句でも作つていらつしやい。」とおつしやる。私は「お土産を持つて來て下さい。」とわがまゝを言つて仕舞つた。お歸りになつた先生のお手には歸り咲きのすみれ野菊なでしこの一束があり、御手づから病床に置かれた。

瀧谷寺の句會は午後一時〆切といふので、早めに晝飯

音楽は尙ほ續きをり

を召し上つた先生は、紫色の布靴を肩へかけながら、又「行つて來ますよ。」とお顔を見せて下さつた。今日の日を待ちながら遂に起き上ることさへ出來ない私は「先生早く歸つて下さい。」とわがまを言つた。先生は「早く歸つて來ますから待つていらつしやい。」と言はれた。脇から年尾先生が「句會の人に怒られますよ。」と笑はれた。夕方豫定してゐた時間より早く歸つて下さつた先生は「早かつたでせう。」と玄關より真直ぐに病室に來て下さつた。灯の色がやゝ濃くなつた頃、お風呂より上られた先生は、私が五年程前に鎌倉に居た頃、お元日にはじめて先生のお宅の玄關でお目にかゝつた時のお顔の色の様

だとふと思つた。前夜京都よりお迎へに來られた比古様に、年尾先生「一緒に入りませんか。」とお風呂を誘はれたが、比古様は鼻をくすんと鳴らして、「おゝきに。少し風邪氣味ですよつて。」と顔をくしやく／＼にして笑はれて、こつくりお辭儀をされた。比古様は寒がりやなそうので、外の時雨の音を氣にされてゐる。

さて夕食を二階でと云ふことになつたが、先生のお心づかひで、「愛子さんさへよければこゝで。」とも「愛子さんの好きな様になさい。」ともおつしやつていたゞく。私は御一緒にしていたゞき度いのは山々だけど、まさかこんなな寝てゐる脇ではあまり勿體ないと思ひつゝもつゝい、

「ではこゝで召し上つて下さい。」とわがまゝを申上げてしまつた。病床を少し繪屏風の方へづらして先生、年尾先生、比古様、柏翠先生の圍まれる圓い卓が、床の間よりに運ばれて食事となつた。私はあごより布圍の方へ白いきれを掛けて、母のくれるものを口をあけて待ち／＼食べた。何だか少し恥かしかつたけれども、年尾先生が、「僕だつて聖路加に居た時は看護婦さんにそんな風にして食べさせて貰つたですよ。」と云はれたので安心した。

御食事の途中より、八切八時五句で一ト句會といふ事になつた。今日の瀧谷寺句會に投句のみにて出席出来な
い私は、もしや先生がお疲れでなければ、この部屋で句會をしていたゞけたらとひそかに願つてをつたのに、いつか先生のお耳に入り、私のわがまゝを聞き入れての事であつた。清記も選句も出来ない私は、句を投じたまゝ目をつむつて年尾先生の披講を聞いた。

あすよりは病忘れて菊枕 虚子

私はぎくりとした。快くならねばならないと思つた。前の日もお別れの日にも「きつと快くなりますからね。」とじつと私を見つめて豫言の様に云つて下すつた先生のお顔を、苦しくなると思ひ出して拜む。私の阿彌陀様は

音楽は尙ほ續きをり

先生である。私は今いくつわがまを云つたぐらうと數へてゐる。そして大きなくわがまを思ひきつていふのを忘れてゐたのである。それは「今度はいつ來て下さいますか、そして必ず。」と云ふことである。

其の後一ヶ月経つて又出た「花鳥」の二月號にも愛子の頁といふのがある。それには斯んな文章が載つてゐた。

田 芹

愛子

食慾の無い日が二三日續くと急に心細くなり、病氣の

ことが氣になり出す。こういつた或日、ホトトギスが來て野上彌生子様の日記を讀んで芹が食べたくなつた。先生と立子先生を輕井澤へ招かれてのことらしい。酒の粕汁につくしの佃煮、味噌つきのうどの朝食と書いてある。先生はつくしが好きとか、私も急につくしの佃煮を食べたくなつた。うどは餘り好かないけれど、これも一寸食べて見たい、と思ひつゝ讀んでゆく。野菜のにぎりすしといふ所で、「野菜のにぎり壽司食べたいなあ。」と聲をあげてしまつた。それにしても早く春が來るといふなあと考へつゝいつも病床の脇に置く手文庫の中より一通の葉書を取り出した。

音楽は尙ほ續きをり

御葉書萬謝

あなた方も御元氣結構

私の方も皆丈夫

御両親様によろしく

吹雪にも虹にもよろしく

雞にやる田芹摘みにと來し我ぞ

署名もなく消印もはつきりしないが先生よりいたゞい

たものである。吹雪にもと云ふのは嘗て先生をはじめて三國にお迎へした秋、九頭龍川の吹雪の美しさをどうかして先生に見ていたゞきたいと申し上げたら、そんな時は鎌倉へ電話をかけて下さいとほほゑまれたことがあつた。又虹にもと云ふのは、その旅の途中、私達が敦賀までお送りした折遙かに三國の空の方に美しい虹が立つのを御覧になつた事があつた、それである。

扱昨年六月ホトトギス六百號記念大会が小諸であつた時、柏翠先生と母と三人で虚子庵へ參上したが、その時立子先生の御案内で先生のお好きな淺間へ向ふ坂道や、立子先生のお好きな澤の家などに立寄つた事があつた。

音楽は尙ほ續きをり

郭公が鳴いて美しい山水がほとばしつてゐた。先生が芹をお摘みになつたのはどのあたりであつたのかしら、野道かしら、澤のほとりかしら……と今病床にゐながら考へてゐる。先生の芹をお摘みになる姿を想像してみる、浅間を描いてみる。それが今の私の楽しみである。

昭和二十二年三月

私は、小諸の土地の人の俳句會が俳小屋にあつた其席に出てゐる間も多少咳が出て其に涕水が流れ出て苦しかつた。少し熱もあるやうであつた。早く切り上げて古い

家の方の炬燵に當つてゐて、俳小屋に集まつた人の、聲を掛けて歸つて行くのも障子をしめたまゝで見送りもしなかつた。二日許り前のことであつた。夜中にふと眼が覺めて見ると、上顎ががさ／＼に乾いてゐて變に心持が悪かつた。その上顎のがさ／＼してゐるのが喉の方と鼻の方にはびこつて行つて、終に氣管支カタルと鼻カタルを起したものであつた。さうして其夜から寢込んでしまつた。はじめの間は八度五分位の熱が續いたが七度五分位に下つてからなかく解熱しなかつた。

昨年三國へ立寄つてから、愛子からよくちよい／＼と手紙が來た。「世の中で今の私が一番伴せな様な心持がす

音楽は尙ほ續きをり

る。「先生の足が遠ざかった時一度にとつと涙があふれ
出た。」「又小諸に行くことを楽しみに早くよくなる。」
「虹が立つたそうだが起き上つて行つて其を見ることが
出来なかつた。」「一日を一年と思ひ暮してゐる。」「立子
先生から玉藻俳句會の句稿を返して貰つて、其節手紙も
貰つて嬉しかつた。」「杞陽先生からは度々葉書をもら
う。」「ちと先生からも手紙をください。」「『苦樂』に出た
『虹』をもう何十回讀んだことでしょう。」など、言つて來
た。さうしてこんな句も書いて來た。

美しき布團に病みて死ぬ氣なく

愛子

私は長い旅行をしたあと忙しい毎日を送つてゐたので、
さう度々手紙を出すことも出来なかつた。唯句稿を返す
時分に、句稿に點をつけた赤い鉛筆で、序に其句稿の端
に一行か二行の文句を書いてやる位であつた。其は「病
氣はどうか。」「元氣を出して早くよくならねば駄目だ。」
「其後起きる稽古はしたか。」など、いふこと位であつた。
柏翠から又、「愛子は咳が多いのと衰弱してゐるのでな
か／＼起きられない。」「暖くなるまで體力が續くことを
ひたすら願つてをる。」「悪い方といふでもないが良い方
といふでもない。」「今日も亦雪が降りはじめた。」「愛子

音楽は尙ほ續きをり

は少し落着いて唯今は眠つてをる。」「一羽の雞が金網の
中で餌をひろつてをるが、これは愛子に食べさせる爲に
買ったものである。」など、言つて來た。

美佐尾からも手紙が來て、「町へ出て『苦樂』の廣告を
はじめて見た時、人にあやしまれる程長く立ちつくして
『虹』の文字に吸ひつけられた。」とか「新年になつてはじ
めて三國へ來て、昨夜は愛子の枕邊で夜が更ける迄話し
た。」とか言つて來た。

そんなことで愛子に格別の異變が迫つてゐるものとは
思つてゐなかつた。

私の發熱は悪性のインフルエンザとのことで、今年は

微熱の長びくのが大變多いとのことを、醫者もいひ、又
訪問してくる人も言つた。私は最早老人であるから微熱
でも其が死因にならぬとも限らぬと覺悟を極めてゐたが、
其覺悟が仰山だといつて老妻などは相手にしなかつた。
さうして私が、「我儘をいふのは病人の權利だから、せい
出して我儘を言ひなさい。」といつか愛子に言つてやつた、
其事を今度は私自身に當てはめようと思つたが、老妻は
なか／＼其を許さなかつた。私は愛子に句稿をかへす序
に、例の通り赤い鉛筆で戲談半分に其事を訴へるやうに
言つてやつた。

其後愛子からは返事が來ず、唯柏翠から簡単な手紙が

音楽は尙ほ續きをり

来た。其には、「愛子は目下八度六分許りの熱があり、左の肋膜に新たに故障が起こつたらしい。愛子の頁の文章をほめていたとき何やら切角考へてゐるらしい。すべて先生の光の中に生きてゐるやうな氣がする。先生のぐんぐんとよくなれることを祈念する。醫者は愛子の命は今月一杯だといふ。併し愛子はなか／＼元氣があつて、私が却つてはげまされてをる。」と斯んなことが書いてあつた。

私も微熱が、いつ迄もとれないので、少々くさ／＼して來てゐるところであつた。愛子と一緒に病床にあつて、諸共に靜かに死を待つといふやうな心持になつて見ると、

心の平かなのを覺えるのであつた。

さう斯うしてゐるうちに斯んな手紙が來た。これは愛子の口で言つたことを柏翠が筆記したものであつた。

先生。

ごきぶんいかゞです。

わがまゝの方いかゞですか。

先生のわがまゝと云つても先生のわがまゝなんて想像がつきません。

わたくしはあい變らずわがまゝを云つてをります。意を強うしてわがまゝを云つてをります。

音楽は尙ほ續きをり

一つ先生とわがまゝくらべをしようかなあ……と考へ
ることもありません。

二三日前には死を決心しました。が幸ひこんなことが
云へる様になりました。

でも、いつ又、二三日前の様なことになるかも知れな
いと覺悟はしてをります。しかしがんばります。少し
良くなつて来たのですから。それに玉藻同人にまでし
ていたゞきまして、もつたいたいと思つてをります。
たゞホトトギスの巻頭をとらずに死ぬのが残念だと思
ひます。

あれやこれや考へますと、まだく死ねないと思ひま

す。

先生、どうぞお大事に。

電報只今到着致しました。

有難う存じます。

お言葉に従ひがんばります。

さうして其に添へて柏翠の手紙がついてゐた。

愛ちやんの云ふまゝを筆記して先生へのお便りが出来
ました。

濃くなりつゝ、うすくなりつゝ虹がかゝつてをります。

音楽は尙ほ續きをり

今は濃い方です。

母と二人愛ちやんの布團をはさんで一晩起きてをりました。女中の一子も「ねむくありません」と云つて裾の方に坐つてをりました。

前には右でしたのが今は左も肋膜炎を起し、その肋膜が心臓に癒着してをると醫者が云ひます。そのせいか急に心臓が衰弱したらしいのです。カンフルをしばしば打ち、ブドー糖も注射してをります。

母も愛子も私も同じ心で過してをります。すべてをあるがまゝなるがまゝにまかせて、しかしその中で最善を盡そうと。そしてその心の中に先生がおいでになり

ます。

でももう一度良くなつて、小諸へ、鎌倉へ、参りたいと思ひます。私も昨日は具合が悪う御座いましたが、今日はよろしい方です。

母は元氣です。なか／＼氣丈夫です。

女中の一子といふのは十四五の少女であつて、此前私の行つた時にも布團の上げ下ろしから膳を運ぶのなど、すべて一手でやつてくれて、まめ／＼しい可愛ゆい子であつた。其子迄が愛子の病床に仕へてゐる様が淋しく想像された。

音楽は尙ほ續きをり

其から又四日置いて、

愛ちゃんはがんばつてをります。元氣を出してをります。水晶の念珠を右手首にかけて、今生の縁を楽しんでをる様です。

と言ふ柏翠の葉書が来た。私は其手紙を受取つてから、水晶の念珠を右手首にかけてゐるといふことが頭を離れなかつた。あの病み衰へた手首に水晶の珠數をかけてゐるのかと、昨年十月に其病床を見舞つて親しく見た其細い手首を想像するのであつた。さうして其珠數を手首

にかけてたまゝ静かに横はつてゐる様がけなげにさへ思はれるのであつた。さうして又私の夜眠れない時などは其水晶の珠數を手首にかけて静に寝てゐる愛子の容子を想像してゐると氣分が落着いて来て、いつか静に眠に落つる事が出来るのであつた。

さうしてこんな電報が来た。

ニジ キエテスデ ニナケレド アルゴ トシ アイコ

生死の境を彷徨してゐることがわかつた。電話が通じれば電話をかけたいと思つたが、郵便局に聞き合すと、

音楽は尙ほ續きをり

小諸から三國へは通じないとのことであつた。
それから柏翠の葉書が来た。

88

四月一日午後四時五十分でございました。只今納棺を致しました。「小諸雜記」一冊と新らしい句帳を入れました。その前に母達と愛子を、先生の命名して下さいましたあの九頭龍川に臨んでゐる二階の愛居に運びました。行き度いと云ひ遣しましたので。

虹の上に立ちて見守るてふことも 愛子

虹の上に立てば小諸も鎌倉も 同

愛子は終始虹のことを考へながら息を引取つたものらしかつた。

これより前、杞陽は私の病氣を心配して、一度わざわざ東京から見舞に来てくれた事があつたのであるが、又四月一日に重いリュックを背負うて、又見舞に立寄つて呉れた。そして、

「これから三國へ廻つて、豊岡に歸ることにしませう。」と云つた。

89

音楽は尙ほ續きをり

「それならば、少しでも早く行つてやつて下さい。」
「さうませう。」
と云つて、その翌朝の汽車で發つて、三國へ行く事になつた。

90

そんな話をしてゐる時に、愛子は既に息を引取つてゐたのである。至急電報も一日はかゝるその時分のことであつたから、愛子は既にこと切れてゐたといふ事は知らないで杞陽は曉方の五時の汽車で發つて行つた。
私は毎日午後になると、輕微ではあるが、體温が昇つてゐたのが、愛子の息を引取つたといふ日からそれがなくなつた。

愛子の死を聞いた時は、私は別に悲しいとも思はなかつた。私は愛子とは反對に、快くなつて來たのであるが、それを別にうれしいとも思はなかつた。

私は杞陽が三國へ行く時分に、原稿紙の裏に鉛筆で、

虹の橋渡り交して相見舞ひ 虚子

といふ句を渡して、それを愛子に届けてもらふやうに托したのであつた。がその時分には既に愛子の命は絶えてゐたのであつた。

音楽は尙ほ續きをり

91

虹の橋渡り遊ぶも意のままに 虚子

愛子は、今は病苦を逃れて虹の橋の上に悠々嬉遊してゐるであらうと思はれた。

昭和二十二年四月

暫らく三國からの音信が絶えてゐた。四月二日の朝汽車で發つ時分に、杞陽は大分にくたびれてゐた様子であつたが、果して三國へ無事に着いたかどうかといふ事も、

少し不安なやうな氣がするのであつた。が一向にその後便りがなく、少しも模様が判らなかつた。私は段段良い方に向つたが、未だ自分で筆をとる氣分にはなれなかつたので、こちらからも、消息は怠つてゐた。

漸く十日目頃に一枚のハガキが來た。それにはかうあつた。

五日三國を辭し

六日豊岡に歸著致しました

暫くこちらにをります

先生はその後いかゞでいらつしやいますか

音楽は尙ほ續きをり

子供に羽衣を教へてをります

簡単な手紙で、三國の方の模様は判らないが、併し杞陽が無事に豊岡へ歸つた事は、これで明らかになつた。そのハガキが來てから二三日經つて、杞陽の長い手紙と柏翠の長い手紙と、同封した厚い封筒入りの書狀が來た。その杞陽の手紙は豊岡に歸る前に、三國で書いたものであつて、柏翠に出して貰ふやうに頼んでおいたものらしいが、それを遅れて柏翠が出した爲めに、豊岡から出したハガキと前後して著いたのであつた。柏翠は杞陽の手紙は自分のと同封して出さう、又自分からも詳しい

ことを報知しようと思へてゐたのであつたが、筆をとるのがもの憂く、遅れたものゝやうであつた。私はその頃病床に起き上つてゐることが多くなつた時であつたから、坐つてそれらの手紙を読んだ。先づ杞陽の手紙にはかういふ事が書いてあつた。

先生、私は二日午後七時に三國へ着きました、その日の通夜、三日の告別式、野邊送り、四日の骨上げ、寺院への納骨式、に列席し、本五日午後三時福井發、但馬に歸ります。

愛子は私の到着を待つてをつたそうですが、最後に、

音楽は尙ほ續きをり

「先生におよろしく」と云ひのこして逝つたとのことです。

96

木彫の観音像があり、それにのりうつるんだ、といつて、その像を凄い顔をしてにらんでゐたさうです。この観音様を信仰する者は、必ず咳を治してみせるといつたさうです。その観音が脇床に飾つてあり、そこにも線香が立つてゐます。

先生の御弔電は骨壺の上に、はさんであります。電燈は病中以來の薔薇の模様の笠のまゝにともつてをります。その電燈の笠は何か愛子を偲ばせます。

告別式は自宅で行はれました。(三日午後一時)、その時

の様子は、その佛壇の右に並べて柩が飾つてありました。こゝら北國では、まづ佛壇の前で儀式がおこり、それから柩前に移るのがならはしたさうです。棺に納めたのは二日の朝であつたさうです。二日のお通夜の人々の一應去つたあとで、お母さんと柏翠君にお棺、(立棺)の蓋をあけてもらつて冷い手に、先生の御見舞のおしたゝめの御句を渡しました。「愛子さん。先生からのお見舞。」と聲を出して私はいひました。お母さんが、真黒な髪の毛の房々とした、うつ向いた死顔を上げて呉れました。綿が詰つてをりましたが、いつもの二つの眉毛の迫つた正しい顔をしてゐました。「間に合

97

音楽は尙ほ続きをり

はなくて御めんなさい。」と云ひ、それから皆で、「さ
よ—なら。」をいひつゝ、蓋をしめてもらひました。

三日の朝は裏の二階の、先生のお名附けになりました
「愛居」に行きました。「愛居」は明るく、しんとしてゐ
ました。「山川に一人髪洗ふ神ぞ知る」の御句が床にか
かつてをりました。

お母さんは、出棺の時に一番激しく泣きました。

柩はかるゝと白木のきやしやな駕にのつて、よくふ
らゝと揺れて行きました。その夜は皆早寝をするこ
とになり、お母さんが淋しいからといふて、私を二階
から階下に寝るやうにいひましたので、病室であつた

部屋に寝みました。

愛子病中に、こはい夢を見たさうです、……お母さん
が、語るところによりますと、首の無いものが、裾か
ら入つて来て、冷い掌を自分の掌と合せた、といふこ
とだつたとのことです。それがあまり氣持が悪いので
次の夜は皆して賑にしてゐて呉れといつたさうです。
その話をきゝながら、私は先生の御覽になつた首の無
いものゝことを考へ合せてをりました。變です。
四日朝骨上げ、私も一片の骨を拾ひました。(私はとき
どき、先生がそれを命じてをられるのか、愛子が命じて
をるのか、といふやうな氣持でそれをしたのです。)

音楽は尙ほ續きをり

こゝから考へますと、小諸の山河が明るく考へられます。又豊岡の子供らのことが考へられます。先生も又一度は三國へいらつしやいますか。私もまた来る時があるやうに思ひます。

私はこの杞陽の手紙を読んであるうちに、「おつ母さんは、出棺の時に一番激しく泣きました。」とある文句に至つて、はたと目頭が熱くなつた。

それから又其手紙に「柩はかるゝと白木の華奢な駕に乗つて、よくふらゝと揺れて行きました。」とあるのが、私の目に焼きついた。

柏翠の手紙はかうであつた。

先生

いろゝ有難う存じました。愛ちゃんはたゞゝ「先生に御よろしく、御體おだいじに。」と申しました。

今、佛壇は次の間の唐紙の中のものとの位置にかざつてあります。

骨壺は中段にあり、その白布のむすび目に、先生の御弔電がはさんであります。

潮の如くに北陸の春が参りました。

母が弱つてをりますので、心配です。母は何か商賣を

音楽は尙ほ續きをり

しようと思しす。

熱は餘り出ない性たでしたが、食が細いので次第に衰弱致しました。

秋、先生の御立寄りいたゞきました時は無熱状態がつゞき醫師も少しづゝ起きてよいと申す様に良好で御座いました。

しかし本人は、起きると咳が出ますのを、こはがつて、なか／＼に起きませす、専ら安臥のまゝ、安静をつゞけて病のしづまるのを待つてゐたのでした。

しかし本年に入つて時折頭痛（左半分）をうつたへ、又今まで無事であつた左胸部にも症状が起つて参りま

して、遂に左肋膜炎が起きて急に呼吸が苦しくなり、餘計に死期を早めました。

先生のお蔭をもちまして、心豊かに最後まで俳句に思ひをひそめ、小諸をおしたひし、鎌倉を思ひして立派な往生をとげました。

杞陽さんは終始、愛子の最も好み、喜んだ、

先生——愛子——私

と云つた、つながりを重んじ、つゝましく、静な中に情愛深い行動をとつてくれました。

それから續いて又杞陽から手紙が來た。

音楽は尙ほ續きをり

三國の數日は、特殊な重苦しい、悲痛な感じでした。

出發致します五日も引留め／＼されました、遺骨と共に東尋坊へ吟行しやうとのことでもございました。初七日を過ぎぬお骨が、ふらふら歩きをするのも輕卒ではないかと思はれ、面白いとも思はれましたが、それが自分の爲めに計畫されるのならば辭退しやうと思ひ、丁度昨年六百號の歸路一泊して、翌朝引留められつゝも、旅を急いで不本意に別れました、その時と又同じやうに、愛子亡きのちの人々に、引留められつゝ見送

られつゝ三國驛を立ちました。一郎氏も見送つて呉れました。素竹君は福井まで荷物を負つて送つて呉れました。手厚いことでした。これは私が私一個人でなく、先生の御見舞の使者として皆さんの頭にあつたからであらうと存じます。

私は愛子の死に臨んでの心境はどんなであつたらうかと、それが氣懸りであつた。柏翠の手紙などで、あらましは判つてゐたが、なほ具體的な話が聞き度いと思つたので、柏翠にも杞陽にも何かそれに關した事實があれば知らして呉れるやうに云つてやつた。杞陽から返事が來

た。

御快方心からお喜び申上げます。

愛子が虹の上から、机に向はれた先生を喜び見てゐるやうに思ひます。

「先生におよろしく。」とつぶやいたこと、非常に美しく眼が澄んだことを聞いてをります。死に面した時の心の持方として、私に知られてゐるのは、それだけのことでございます。

家に關し、親や柏翠君に關する遺言は、正式に自筆で、驚くほど力ある字でした、めたさうです。

その字の勢に柏翠君はびつくりしたそうです。人を想ふ時には、前方をみつめて、眞剣に想ふのださうです。私は、さうして先生を考へてゐる愛子といふものに胸を衝かれます。

何かの時に、不思議な力の出せる人だつたと思ひます。

柏翠からは、

御體は如何で御座いますか。

もう縁側にお出ましの御様子、何よりに存じ上げます。愛ちやんの三七日忌もすみしました。

音楽は尙ほ續きをり

十九日夜突然小濱を廻つて京都の比古さんがお出でになりました。

108

母も比古さんが來られたので、淋しさがまぎれた様子です。私も少し元氣になりました。一日、かねて母、愛子、私で行きたいと話してゐた九頭龍川の對岸の桃の村へ參りました。比古さんと私は松の根方で、ひばりを聞き、母は松笠を風呂敷に拾つてをりました。愛子の死に臨んでの心持は、安心しきつて、それは先生を自分の心の中で抱いて満足してをるといふ、安心であつたらうと思ひます。母が右手、私が左手をしつかりとにぎつてをりました。

死のしばらく前より、看護婦や手傳人や母の姉や母や、私によつて稱名念佛の聲が起つてをりました。愛子も稱名してをりました。

臨終には、二度大きな目を見ひらきました。その顔は今まで見た事のない美しい顔で御座いました。

私は杞陽の手紙にあつた、愛子の柩は白木のきやしやな駕にのつてかるくと揺れながら行つたといふ文句が、兎もすれば思ひ出されるのであつた。そして、

黒髪の冷たき棺に崩折れて 杞陽

音楽は尙ほ續きをり

109

骨壺に追ひすがるもの白き蝶 同

110

といふ二句と合せ考へて、愛子の骸になつた後の様子を想像することが出来るのであつた。

それから又杞陽からこんなハガキが来た。

柏翠君は僧侶になつてはどうか。

と昨日ぐらいから、しきりに考へてをります。

京都へでも出て、静に佛道に入る工夫はつかぬものでございませうか。

先生どうお考へあそばします。

(昭和三三・七『苦業』)

櫻に包まれて

四月十五日

家壁虱に食はれたのがもとになつて皮膚の痒いのがもう半年以上も続く。スカポールを三瓶もつけたのであるが効力がなく、温泉の花を湯に溶して其れに這入つて見たが、今度は皮膚全体が荒れて、患部が益々悪くなつて行く様であつた。其の上或る日湯から出た時に、折節小諸に来て居つた立子が私の顔を見て、「お父さんどうなすつたのです、其顔は。」と言つた。鏡を見ると臉が腫れて、目が細くなつてゐた。或は腎臓に故障でも出来たのかも

櫻に包まれて

知れぬと思つて醫師に検尿をして貰ふと、果して白濁して、軽い急性腎臓炎か萎縮腎かどうかとの事であり、成るべく蛋白質のものを攝らず、鹽分を制限するようにとのことであつた。これより前上京してゐる時分に、電車の中で腦貧血を起した事もあるし、又小諸に歸つてから下痢が二十日ばかりも續いてどうしても癒らなかつた事もあるし、どうも身體が變調の様である。醫師の言ふ通りにして、斷然肉や魚肉や鶏卵豆類等を遠ざけ、鹽分を制限して、醬油をかけるところを酢をかけて食ふことにした。さうして數日を過してゐるうちに、段々に瘦せて來る様であつた。さては今迄多少人に太つてゐると言は

れてゐたのは、或は浮腫が來てゐたのかも知れぬと思つても見た。が、それとは別個に、痒い事は少しも變りがなく、俳句の選などをしてゐる時には、知らず識らず腹や背中や脚などをばり／＼と搔いてゐた。頭も痒かつた。搔き初めると愈々痒くなつて來て、のぼせ上る様であつた。時時は、「どうでもなれ」と、やけになつて身體中を搔き爛らした。皮膚病の爲に腎臓炎を起す事もあるし、又腎臓が悪い爲に皮膚病になる事もあるとの事を醫師も言ふし人々も言つた。私のはどちらが先なのであるか分らなかつた。兎に角スカポールをつけた當座は痒いのが暫く止んでゐるので毎日二度ばかりも塗つてゐたのであ

るが、そのスカボールがなくなつたので心あたり補充を言つてやつた。その中に新潟醫大の素十君もあつた。素十君は、早速返事をくれて、スカボールなぞつけて素人療治をやらすに、兎に角新潟へ来い、と言つて来た。病院には内科も皮膚科も揃つてゐるからと言つて来た。又自分のうちに泊つて病院に通ふとすれば近くて便利だからとも言つて来た。そこで、仕事の都合で延びくになつたが、折節小諸に来た年尾を連れて午後二時の汽車で今日は愈々新潟に行く事にした。混雑する事を豫期した汽車は案外すいてゐた。それが先づ私の心を落著けた。小諸では櫻は未だ咲いてゐな

つたが、途中の所々にある木はぼつぼつ綻び初めてゐた。夜十時を過ぎて新潟へ著いた時には改札口を出る乗客は二三十に過ぎないかと思はれた。新潟の驛は淋しかつた。驛前に二臺のバスが待つてゐたが一臺は空つぽの儘で出て行つた。

みづほ、素十兩君は驛で迎へて呉れた。兩君は驛の暗い灯で私を見守つた。今宵は篠田に泊る事にしてあつたので取敢へず其處に落著いた。

四月十六日

櫻に包まれて

今朝素十君に迎へられて素十郎に行き其處で晝飯を濟ませた。みづほ君が来て、私が極端に食物の制限をしてゐると言ふ事を聞いて、それ程にする必要はあるまいと思はれるが、まあよく田阪教授の診断を受けたらよからうと言つた。素十君はうちに泊つてゐて病院に通ふ事にしてよし、又病院に入院する事にしてよし、どちらでもいゝ様にしてある、と言つた。私は入院することと豫め極めてゐた。そこでみづほ素十兩君に連れられ、年尾と共に二時頃始めて病院に行つて田阪内科の三號といふ病室に這入つた。見廻して見ると窓の白布のカーテンに濱口内科と墨で書いてあるのが目にとまつた。それは

幾度か洗濯されたものであらうと思はれて墨がにじんで薄ぼけてゐた。田阪内科の前は亡き濱口今夜君の内科であつたのだ。

皮膚科の小山游魚博士が來た。著物を脱いで皮膚の痒い所を見て貰つた。

つゞいて田阪教授の一應の診察を受けた。それらを濟ませた所へ自分の教室を出て立寄つたみづほ教授と、素十教授、年尾と四人で、一先づ素十郎へ歸る事になつた。

よく晴れて風もなく非常によい天氣であつた。寒からず暑からず、咲き残つた梅、杏、それに咲き初めた櫻な

櫻に包まれて

どが一時に研を競つてゐる麗かな春の一日であつた。
今日は新潟でも今迄にない天気だそうで、蝶がうらうらと道の上を飛んでゐるのを見て、みづほ君が「これがこちらでは初蝶ですよ。」と言つた。

晩食にはみづほ、田阪教授の外に和久井教授も呼んであつた。田阪教授は今度私の世話になる人、和久井教授は昨年章子、美子母子の世話になつた人で、素十夫妻の特に心を配つてくれた夕食の卓だと思はれた。

診察の間は蛋白の制限はしなくつて普段の通りの食事を攝る事、酒も一二杯はよからうとの事、を田阪教授は言つたので、早速盃を上げて食卓の魚にも箸をつけた。

九時過ぎ富士子夫人、年尾に送られて病院に戻つた。十四夜と思はれる月が晝よりも明るい位であつた。誠に春の夜と言ふ感じであつた。富士子夫人が何くれとなく世話をして呉れたが、やがて年尾と共に歸つて行つた。年尾は今夜高野邸に泊つて、明朝早く和田山の假住居に歸る事になつた。

四月十七日

ゆふべは早くから眠つた。夜中に痒いので屢々目を覺したが、今朝は靜かに又よく眠つた。眠れぬかも知れぬ

櫻に包まれて

と思つてか、睡眠剤が一服来て居たが、眠れぬどころではなく實によく眠つた。富士子夫人の心遣ひから夜中にどんなことがあるかも知れぬと言ふので、屈強なはるといふ女中を次の間に泊らせた。そのはるさんの來たのも今朝早く歸つたのも知らずに眠つた。暫く夢うつゝの境にある耳に、中庭の松の木にある囁の聲が快く響くのであつた。

今日から尿を調べる事になり、尿の分量を量るべく、午前六時から午後六時迄、又午後六時から翌朝の六時まで、二つのガラスの瓶が用意されてゐた。朝の體重を量つた。

特に私の係になつた小黒芦川學士が来て、同じく私の係になつた秋山看護婦と二人で、私の耳の血を採つた。それが終つて素十君の家からおはるさんが朝食を運んで呉れ、部屋の掃除をもして呉れた。

芦川君が来て三柏會の事をつぶさに話した。三柏會と言ふのは、濱口今夜教授を追慕する意味の俳句會で、今夜君の紋が三つ柏である所から、みづほ君がつけた名前前であるさうな。前にも言つた様に田阪内科はそつくり濱口内科を受け繼いだのであつた。芦川學士は濱口教授の教へ子の一人であつた。

芦川君に連れられてレントゲン室に行き心臓の鼓動を

櫻に包まれて

はかる電動圖を採り、又別室でレントゲンの寫眞を撮つた。

124

濱口未亡人が私の入院した事を傳へ聞いて見舞ひに来て呉れた。

雨が降り出した所へ素十君が来て、共に素十郎に歸つて晝飯をしたゝめた。

二時迄に皮膚科の橋本教授が來診するとの事であつたので、素十君と共に病院へ歸つた。橋本教授は田阪教授の診斷が終つてからの事にしようとの事であつた。

素十教授の法醫學教室の小使永松西瓜君が来て呉れた。西瓜君に頼んで病院の床屋に来て貰ふ事にした。

診察著の儘でみづは教授が來た。みづは君と話しながら床屋に髪を刈らせた。みづは教授を話し相手に髪を刈ると言ふのはこの病院にゐて少し禮を失する事であるかと思はれた。

湯が沸いたと言ふ事を富士子夫人から知らせて來た。素十郎に歸つて夕食を食べ、それから入浴した。

雨が降り出したので富士子夫人が提燈をつけて送つて呉れた。及川仙石教授が病室に私の歸るのを待つてゐてくれた。聞く所に依ると仙石君の娘さんが眼の怪我をして入院してゐるとの事であつた。

125

四月十八日

六時起床。毎晩の様に熟睡を續けるのであつた。目を開けて見ると、壺にさした大きな櫻の枝と、水鉢に活けたチューリップとが、ベッドの左右の臺に私を見下す様にして置いてあつた。これは婦長の澤栗深雪さんの志であつた。

一天がかき曇り、激しい風雨となつた。濡れそぼつた西瓜君が十能に一杯の炭火を持つて來て呉れた。

芦川學士來診。

大變な天氣になりましたからと言つて、富士子夫人がこれも濡れそぼちながら晝飯を持參して呉れた。

血壓を量る。

烈風となる。

三時、素十郎に向ふ。櫻の花はもみくちやにされてをつた。板塀の倒れた所もあつた。吹き飛ばされさうになるのを辛じて歩く。かき正こと橋本春霞君が生きのいゝ、鯿とかながしらを、佐藤仁也君がきぬごし豆腐と色々の野菜を持つて來て呉れた。病院の歸路に立寄つたみづは君を混へて、素十、春霞、仁也君と小句會を催した。

頭が痒いので搔く度に蓬髪になり、而かも髪が延びて
櫻に包まれて

わたのを、其儘にしてゐたのが、暫く振りで散髪をして、その上この頃俄に魚や鶏卵を食べるので私は病人らしくなくなつたらしい。「寒山拾得の様であつたのがもとの虚子先生に返つた」とみづは君や素十君は笑つた。痒いのは矢張り痒いのであるが。

128

四月十九日

午前七時半芦川君が来て腕から血を採つた。

みづは君が来て其文章「連翹」「芒」を読んで批評を求めた。私は又腹案の短篇小説の筋を話した。暫くしまろまぐわい小山會

の観を呈した。

三時、田阪博士來診。未だ調べは完了しないけれど、腎臓の方は大體心配はないとの事であつた。「まあ保養を十分に温泉にでも來た積りでいらつしやい」と笑ひながら言つた。レントゲンの心臓の寫眞や電動圖の寫眞を見せて呉れた。心臓は年齢に比べたら寧ろ強健な方であるとのことであつた。

四時半、芦川學士について眼科に行き三國教授に眼を調べて貰つた。異常はないとの事であつた。

七時、田阪内科の醫務室で三柏會の俳句會があつた。みづは素十兩君と共に私も出席した。

櫻に包まれて

129

三柏會員の他に馬刀、游魚、先頭、其園、草也諸君の顔も見えた。

壺の櫻は、外面の風雨にさらされた櫻とは違つて、いつ迄も色香を保つてゐた。

四月二十日

今日は尿稀釋竝に濃縮試験といふものをする事になつた。既に昨日の夕食はパン七十五グラム、卵二つだけで他の食物を禁せられた。今日は試験日なので左の通りの注意を與へられた。

午前六時——採尿——朝食を禁ず。體重測定。

〃 七時——〃——採尿後直ちに微温湯一〇〇〇

c.c.を與ふ。

〃 八時——〃

〃 九時——〃

〃 十時——〃

〃 十一時——〃——採尿後乾燥食餌。食パン百五

十グラム、鶏卵二個。醬油 5

c.c.

午後一時——採尿

〃 三時——〃

櫻に包まれて

” 五時——”

” 七時——”——體重測定。普通食。

翌日午前六時——採尿——體重測定。

一〇〇〇c.c. (凡そ五合) の湯を呑むのはかなり骨が折れた。芦川君がそれを察して、傍にあつて色々な話をしながら、私がコップに一杯の湯を呑みほすと、酒のお酌をする様に瓶から湯をついで呉れて、四十分位かゝつてやうやく皆呑んで了つた。

朝十時半、及川教授の娘さんが、お父さんのお使ひとして花を持参してくれた。

四月二十一日

始め入院してゐる間は多少の暇があるであらうと思ひ、昨日みづほ君に話した短い小説でも執筆して見ようと考へて居たのであるが、實際入院して見ると仲々用事が多くて、さういふ暇は無かつた。今日の日曜は醫療の事は一切休んで勝手に行動してよいとの事であつたが、さう言はれたからと言つて、俄に執筆して見る氣にもなれなかつた。

十時高野邸へ行つて、小切れの畫箋紙に、妻子靈前に捧げる句を書いた。妻子と言ふのはみづほ君の前の細君

櫻に包まれて

の事である。その妻子忌の俳句會が今日郊外の寺で催されるとの事であつたので、參會しようかと思つたのであるが、病院からはかなり距離があるとの事で、素十君からの勸告もあり、思ひ止つたのであつた。

龜田の佐藤曉華、仁也の親子、その他妻子忌に出席する俳人が素十郎に集つてゐた。それ等の人々の妻子忌に行くのを送つてから、與一郎、夏子、清文三人の子供等と一緒に食卓で晝飯を濟ませ、一時過ぎ病院に歸つた。

四時頃まで晝寢。

五時高野邸に行き入浴。シャツ、寢巻等を取り換へた。其等の洗濯を富士子夫人に頼んだ。

夕食にみづほ邸から海老の天ぶらを届けて來た。

七時に病院に歸つた。この日午後から好晴で、此の間の風雨に褪せた櫻の花も、色艶を取り戻した感じであつた。

寝る前に、富士子夫人の一篇の文章を読んで、少しばかり筆を加へた。

四月二十二日

少しおなかを悪くしたので晝飯も粥二碗、橋本春霞君が呉れた新らしい鯉の刺身と鹽焼とを食つた。

櫻に包まれて

午後、田阪教授來診。

みづほ教授來。

兩教授懇ろに私の腹を調べた。少し固いものがありはしないかとの懸念であつたやうであるが、先づ無いと極つたらしい。

夜、及川教授來。

四月二十三日

晝に高野邸へ晝飯を喰ひに行つた時見ると、櫻の花はそろ／＼散りはじめてゐた。醫大の櫻もお隣の師範の櫻

も、其の他家々の櫻も、風につれてはらく／＼と散つてゐた。それを眺めつゝ歩く我が足の運びは自然にゆるくなつてゐた。私は新潟に來てから、人々に大事がられ、いたはられて、人々の温情につゝまれてゐる感じであつた。さうして、來た日から今日まで、又櫻の花にもつゝまれてゐる感じであつた。尤も如何なる災厄が前途に口をあけて待ち受けてゐるか其は判らないのである。それももとより覺悟の前である。が今日は幸福感に浸りながら、暫く病室の椅子に腰を掛けてゐた。

山會開催の通知を左の通り發行所に申してやつた。

一、五月十二日（日曜）午後一時より。

櫻に包まれて

一、ホトトギス發行所にて。

一、文章會開催。但し長篇でなき事希望。

一、虚子出席の積り。出席出來難き場合は適宜處置。

一、一、二篇ホトトギス掲載の積り。

通知を命じた人々は、

風生、青邨、深人、龍男、たけし、杞陽、喜太郎、

迷子、年尾、立子。

病院の小使が二三日前から庭を耕して畝を作つたり肥料をやつたりしてをつたが、今日は種を蒔いてゐるのが窓から見えた。暫くそれを見てをつた。

富士子夫人が蒲團の敷布、枕のカバーなどを新しく代

へに来て呉れた。もう直ぐ退院するのだと言つたが、それでも新しい方が氣持がよいでせうと言つて、さつくと取換へて行つた。

高野邸に夕飯に行つた。途中に見る櫻は、暖い晝間は散つてゐたのであつたが、今は少しも散らなかつた。晝間に較べると氣温が大分低くなつてゐたので、花も散るのをやめたものと見えた。

再び、田阪、和久井兩教授と食卓を共にした。

四月二十四日

櫻に包まれて

橋本教授來診。私の皮膚病はたむし、ひせんなどと言ふものとは種類を異にし、元來皮膚の弱い所に持つて來て、年を取つてゐるので愈々その弾力性がなくなつて、家壁虱に喰はれたあとが痼疾になつたもので、それに強烈なスカポールを塗つたり、尙その上に硫黄の湯に入つたりした爲に益々皮膚を痛めたのである。一切左様の事は廢して、これから上げる藥を塗布する事にしたらよからう、それでも尙癒らぬ様であつたらレントゲンをかける事にしてもよいのであるが、レントゲンは二週間位間を置かないといけないから、今日一先づそれをかけて、後は又出なほして來ることにでもしたらよからうとの事

であつた。

小山游魚博士が來て塗布の藥を呉れた。それから外來のレントゲンの部屋につれて行つて、一時間許り、背中、腹、脚など十五箇所にレントゲンをかけた。

田阪教授が芦川學士も連れず看護婦も連れず、獨りで來て、つぶさに診断の結果を話して呉れた。

大體に於て年の割合には壯健な方で誠に結構である。先づ心臓には何の異常もない事が明らかになつた。心臓といふのも筋肉の一つで餘り大事にし過ぎてもかへつて弱くなる。常に適宜の運動をとる方がよからう。又腎臓も腎臓炎と言ふ程のものでなく、年を取ると多少萎縮す

櫻に包まれて

る、その萎縮腎の初期ともいふべきものと思はれるが、大して氣にかける程のものでもない。普通の食物を攝つて普通の運動をして差支へない。蛋白質を多量にとつたり鹽からいものや香味料をとると言ふ様な事を注意しさへすればよからう。次に腸は強健と言ふ方ではないかも知れぬが特にどこが悪いと言ふ様な事はない。又皮膚の方は、腎臓の爲めと言ふ事は出来ぬ。皮膚病を起す程腎臓が悪いとは思はれない。唯弱い脚氣があるからそれを注意したらよからう。

尙その他詳細に話があつた。

急性腎臓炎であるか、老人にあり勝ちな萎縮腎である

かと言ふ事は始めから疑問であつたのであるが、それが萎縮腎の初期と極れば、まだ二三年の命はあるものと考えていゝかも知れぬ。宜しい。明日から又働かう、働かうといふよりも、働かねばならぬことになつた、と考へた。

三柏會が寫眞を撮ると言ふので雨の晴間を見て庭に出た。高野、田阪兩教授、今夜未亡人、それに三柏會員、秋山看護婦等を混へて撮つた。折柄來合せた柏崎病院長の若林君もその中に入つた。若林君は柏崎の療養所の所長であつて、私が療養所を慰問した時は不在で、其後態熊小諸の草庵を訪ねて呉れた事がある人である。

櫻に包まれて

高野邸に行く。今は妓をやめてゐる、かつら、太郎を
始め、大雪崩會の會員がだん／＼と集つて來た。

會が終つた時分は大雨になつて來た。その中を芦川、
游魚、支葉、太郎、かつら、春霞、西瓜等の諸君が夫々
傘を傾けたり棲をはしよつたりして歸つて行つた。

素十君と一緒にみづほ邸に赴いた、今日は偶々みづほ
君の誕生日にあたるので、おとめ夫人の心盡しの夕食の
御馳走が卓上に廣げられた。御馳走が終つた時分に紅白
の大福餅が出た。

「紅白の大福餅が出たな。水竹居が居たら、紅白の大福
餅や誕生日、と早速やる所であらう。」と素十君が言つた

ので笑つた。みづほは、素十と會すると、何かにつけて水
竹居の事が話題に上るのであつた。

四月二十五日

夜中の三時半に目が覺めたが未だ眞暗であつた。それ
にかなり強い雨が降つてゐた。

昨夜は新しい塗布薬を塗つたのであるが、大分痒みが
薄らいで來たやうな心持ちがするのであつた。

少し明るくなつたので五時前に病院を出た。

雨は上つてゐた。薄明りに見る曉の櫻も又風情があつ

櫻に包まれて

3870

た。高野邸に行くとき素十君は既に起きてゐて、裏の畑に
南瓜の種を蒔いてゐるとの事であつた。

澤栗婦長、秋山看護婦がお別れに來た。

素十君は小諸に私を送つて行くとの事であつて、同行
することになつた。及川仙石君が停車場まで見送りに來
て呉れた。小黒芦川君が次の驛の沼足迄送つて來て呉れ
た。途中の櫻はもう葉櫻になつてゐる所もあつたが、ま
だ花の盛りの所もあつた。

(昭和二一・七、ホトトギス)



虹

定價 八十圓

初版

昭和二十二年十二月十五日印刷
昭和二十二年十二月二十日發行

著者

高濱 虚子

發行者

山口 新吉

印刷者

小野 通久

印刷所

文壽堂工場
横浜市中央区磯子区二丁目九番地

東京都中央区銀座西八ノ五

會員番號A二二二二九

電話銀座(市)一一一五五

發行所

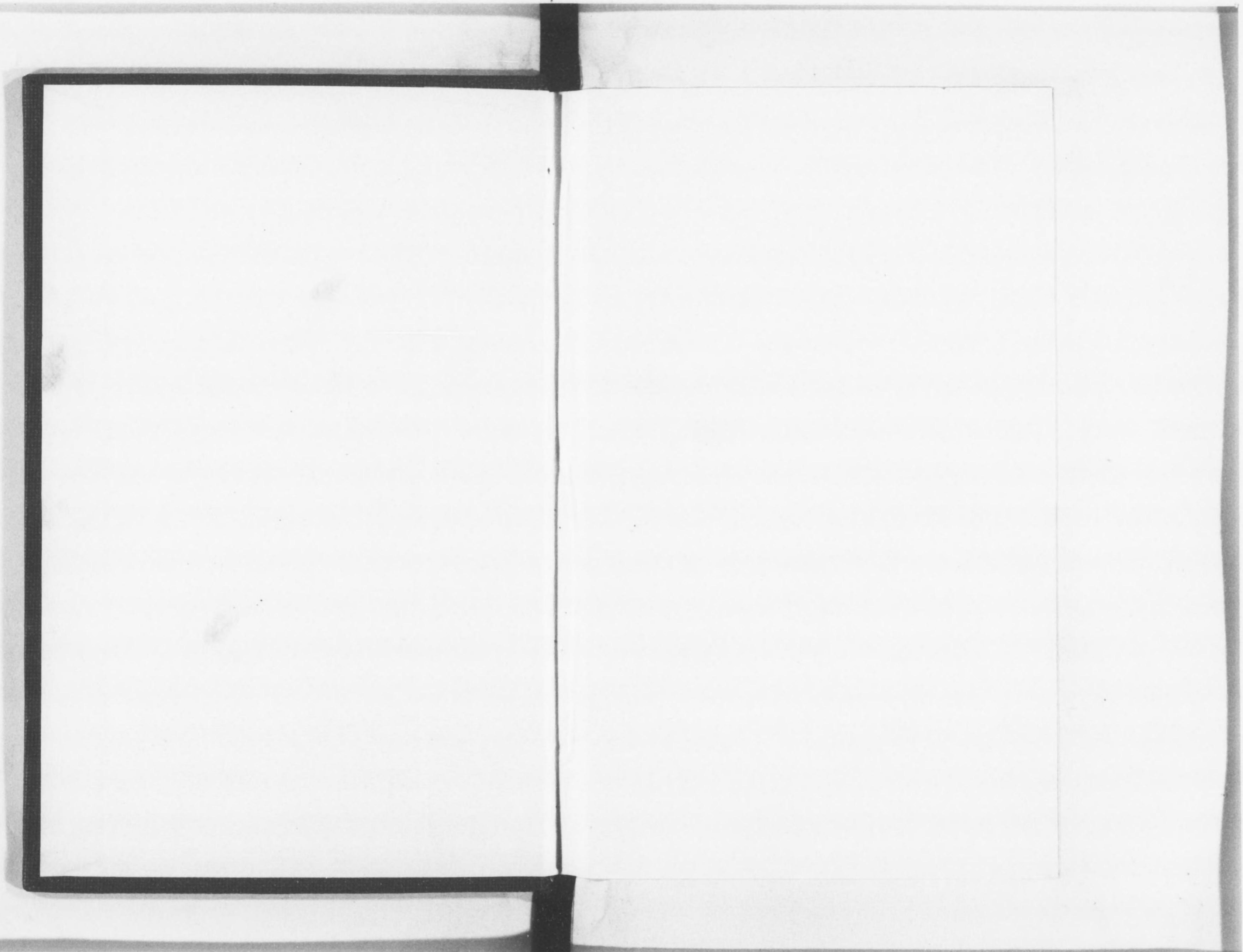
株式會社 苦樂社

配給元

東京都千代田區神田區路町二ノ九
日本出版配給株式會社

XA-70

項目	内容	備考
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10



終

